

「近世初期の政治理想と国家意識」（岩波講座日本歴史 第一〇巻 近世二）岩波書店、一九七五年）のなかで、「親鸞や日蓮の教説が民衆社会に浸透したのが戦国時代であるから、真宗・法華宗を鎌倉仏教というより戦国仏教と考えるべきだと提起して以降、ようやく近年の研究状況が、「戦国仏教」という呼称のひとりあるきといつた段階から具体的な事象の検討や、「実証作業」をとおして議論がかわせる段階へと入つ

河内 将芳著  
『戦国仏教と京都』  
法華宗・日蓮宗を中心に  
伊藤 真昭

本書は、著者の師でもある藤井学氏が「近世初期の政治理想と国家意識」（岩波講座日本歴史 第一〇巻 近世二）岩波書店、一九七五年）のなかで、「親鸞や日蓮の教説が民衆社会に浸透したのが戦国時代であるから、真宗・法華宗を鎌倉仏教というより戦国仏教と考えるべきだと提起して以降、ようやく近年の研究状況が、「戦国仏教」という呼称のひとりあるきといつた段階から具体的な事象の検討や、「実証作業」をとおして議論がかわせる段階へと入つ

本書は、著者の師でもある藤井学氏が「近世初期の政治理想と国家意識」（岩波講座日本歴史 第一〇巻 近世二）岩波書店、一九七五年）のなかで、「親鸞や日蓮の教説が民衆社会に浸透したのが戦国時代であるから、真宗・法華宗を鎌倉仏教というより戦国仏教と考えるべきだと提起して以降、ようやく近年の研究状況が、「戦国仏教」という呼称のひとりあるきといつた段階から具体的な事象の検討や、「実証作業」をとおして議論がかわせる段階へと入つ

た」ことにより、著者自身が法華宗を対象としてその実践を試みたものである。すでに著者は多くの法華宗に関する優れた論考を世に出している。著者は室町期から戦国・中近世移行期の都市住民の人的結合のあり方をさぐるなかで、信仰を媒介とした結びつきとして法華宗に注目し、①『中世京都の民衆と社会』（思文閣出版、二〇〇〇年）、②『中世京都の都市と民衆』（同、二〇〇六年）、③『日蓮宗と戦国京都』（淡交社、二〇一三年）の著書を刊行し、それぞれに法華宗を対象にした論考がある。本書はこれまでの論考の基礎となつたもの、またはさらに補充・補完し、深化させたものといえよう。

本書の構成は、I 師僧と檀徒、II 寺地と京都、III 効進と経済、IV 東山大仏と京都、の四部構成で、I・II が法華宗内部について、III・IV が織田・豊臣政権との関係性についての論考を集めたものとなっている。

内容を簡単にまとめてみる。I では、家職である刀剣の目利き以外にも陶芸・書などにマルチな才能を發揮した光悦を輩出したこと、本阿弥家、摂関家の近衛房嗣とその孫

として松永久秀らの戦国武将が、日親、本

満寺、日珖といった法華宗僧侶と関係を結び、法華宗を支える有力な檀徒となる過程や、その信仰形態、檀徒として法華宗のために尽力していた様子があきらかにされている。

II では、法華宗寺院の寺地が移動する様子を描く。比叡山とそれに加担した近江の六角氏によって鎮圧された天文法華の乱後、堺に避難していた法華宗寺院は、比叡山・六角氏双方に金銭を差し出すことで京都に戻ることが可能となつた。それ以後法華宗は武力対決よりも金銭を贈与することで紛争を回避しようとする方針に転換し、

その費用を捻出するため門流や寺院の垣根を越えて結合する十六本山会合が成立したとする。また本能寺や妙顕寺をとりあげ、京都還住の前後で寺地がどのように変遷したのかを史料に即して検討する。本能寺では、還住にあたっての寺の敷地を土倉・酒屋として著名な沢村氏から、弘通所

としての敷地を公家の高倉家から購入している。また応永年中に比叡山により破壊された妙顕寺では、一〇〇〇貫文を柳酒屋が、三〇〇貫文と土地を小袖屋経意が寄進

して再建され、その後は高倉家から購入し  
た土地に移転した。このように比叡山との  
衝突によって破壊と再建を繰り返した法華  
宗寺院は、信者の寄進によって復興を遂げ  
た様子があきらかにされる。

Ⅲでは、武力衝突から金銭の贈与による  
生き残りを図る法華宗寺院の財源となつた  
募財活動に焦点を絞る。天正四年（一五七  
六）に実施された洛中勧進は、十六本山会  
合が主体となって、洛中の町を単位に法華  
宗信者から喜捨を一〇日間で集めたもので  
あり、ここではその実態を示す「諸寺勧進  
帳」を詳細に検討する。勧進で集まつた金  
銭の合計は上京下京あわせて一二三〇貫文  
余にものぼり、檀徒の経済力や信仰の篤さ  
を物語る史料とされる。勧進は一軒の家で  
も夫婦や親子別々で応じており、檀徒を一  
人ひとり個人としてとらえることで、莫大  
な財が集積されたとする。最終的には家数  
も集計されることから、家ごとの経済力が  
把握され、法華宗教團の募財能力を示す基  
本台帳となつたと評価する。

Ⅳでは、これまでの法華宗中心の記述と  
趣を異にし、よりひろく法華宗も含む京都  
の仏教界（新義八宗）全体と豊臣政権の関  
係について著者なりのご意見をお聞かせいた  
だく。

「戦国仏教」とは何か、という問題にま  
ず法華宗を対象に切り込んでいった著者の  
姿勢は、後進の多くの研究者に刺激を与え  
ている。それぞの宗派で研究が活発化す  
ることを期待するとともに、多くの誤読・  
誤解を著者にご寛恕願い、閣筆させていた  
だく。

（いとう・しんじょう 善隆寺住職）

（A5判、三九四ページ、八二五〇円、法藏館、  
二〇一九・九刊）

係について述べる。このテーマについても  
著者は④「秀吉の大仏造立」（法藏館、二  
〇〇八年）という著書を世に出している  
が、ここではそれ以降に出された論考が並  
んでいる。著者と他の研究者との議論のな  
かで提示された成果としては、大仏が建立  
された場所を大津・山科と大坂を結ぶ汁谷  
口であったとする指摘がある。つまり大津  
や大坂と往復する秀吉の行動パターンの  
途中に選定されたというのである。史料か  
ら導き出されたこの見解は説得力を持つ。  
そして秀吉を取り巻く状況が変化するにつ  
れて大仏の持つ意味合いも変化するため、  
時期を区切つて議論を深めていく必要性を  
主張している。そして最後に秀吉から「國  
家之祈禱」と位置付けられた大仏千僧会を  
検討し、豊臣政権側は、それまでの経緯は  
関係なく、個別の「寺」の集積体が「宗」  
であると認識していたと指摘する。その  
「宗」が千僧会という国家的法会に出仕す  
ることで、豊臣政権から公認され、これを  
もつて「戦国仏教」から新たな段階に至つ  
たと結論付ける。

著者の特徴は、これまでの論考でも明ら  
かなように、真摯なまでに史料に忠実であ  
ることである。史料自身に語らせることに  
よって、より説得力をもたせている。既知  
の史料であつても深い読み込みによつて、  
新たな解釈を提示するその手法は、読みや  
文章と相まって、読者は著者の世界に  
引き込まれていく。その逆に同時代史料に  
よる裏付けのない議論には、それがいくら  
であつたとする指摘がある。つまり大津  
や大坂と往復する秀吉の行動パターンの  
途中に選定されたというのである。史料か  
ら導き出されたこの見解は説得力を持つ。  
そして秀吉を取り巻く状況が変化するにつ  
れて大仏の持つ意味合いも変化するため、  
時期を区切つて議論を深めていく必要性を  
主張している。そして最後に秀吉から「國  
家之祈禱」と位置付けられた大仏千僧会を  
検討し、豊臣政権側は、それまでの経緯は  
関係なく、個別の「寺」の集積体が「宗」  
であると認識していたと指摘する。その  
「宗」が千僧会という国家的法会に出仕す  
ることで、豊臣政権から公認され、これを  
もつて「戦国仏教」から新たな段階に至つ  
たと結論付ける。

著者の特徴は、これまでの論考でも明ら  
かなように、真摯なまでに史料に忠実であ  
ることである。史料自身に語らせることに  
よつて、より説得力をもたせている。既知  
の史料であつても深い読み込みによつて、  
新たな解釈を提示するその手法は、読みや  
文章と相まって、読者は著者の世界に  
引き込まれていく。その逆に同時代史料に  
よる裏付けのない議論には、それがいくら  
であつたとする指摘がある。つまり大津  
や大坂と往復する秀吉の行動パターンの  
途中に選定されたというのである。史料か  
ら導き出されたこの見解は説得力を持つ。  
そして秀吉を取り巻く状況が変化するにつ  
れて大仏の持つ意味合いも変化するため、  
時期を区切つて議論を深めていく必要性を  
主張している。そして最後に秀吉から「國  
家之祈禱」と位置付けられた大仏千僧会を  
検討し、豊臣政権側は、それまでの経緯は  
関係なく、個別の「寺」の集積体が「宗」  
であると認識していたと指摘する。その  
「宗」が千僧会という国家的法会に出仕す  
ることで、豊臣政権から公認され、これを  
もつて「戦国仏教」から新たな段階に至つ  
たと結論付ける。

著者の特徴は、これまでの論考でも明ら  
かなように、真摯なまでに史料に忠実であ  
ることである。史料自身に語らせることに  
よつて、より説得力をもたせている。既知  
の史料であつても深い読み込みによつて、  
新たな解釈を提示するその手法は、読みや  
文章と相まって、読者は著者の世界に  
引き込まれていく。その逆に同時代史料に  
よる裏付けのない議論には、それがいくら  
であつたとする指摘がある。つまり大津  
や大坂と往復する秀吉の行動パターンの  
途中に選定されたというのである。史料か  
ら導き出されたこの見解は説得力を持つ。

そのうえであえて一点だけ付言させてい  
ただく。それは、法華宗がどのようにして  
近衛家や松永久秀、本阿弥家など、社会の  
上層部の心を掴むことができたのかという  
点である。法華宗寺院の復興に惜しげもなく  
多額の寄進をし、また奔走する帰依者の  
存在抜きにして「戦国仏教」法華宗は語れ  
ない。最前線に危険を顧みず赴いた僧侶の  
存在を指摘するが、これはひとり法華宗だ  
けのことではなかろう。文明期以降に京都  
で日蓮宗の教えが広まつてゐる状況はよく  
わかつたが、なぜそなつたのか、その背景  
についてはよくわからなかつた。本阿弥  
清信は日親のどのような教えに心酔したの